

米田 知子

やみ

暗なきところで逢えれば

会 期 2013年7月20日(土)～9月23日(月・祝)
会 場 東京都写真美術館 2階展示室
主 催 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館/読売新聞社/美術館連絡協議会
助 成 芸術文化振興基金
特別協賛 株式会社資生堂/富士フイルムイメージングシステムズ株式会社
協 賛 ライオン株式会社/清水建設株式会社/大日本印刷株式会社/株式会社損保ジャパン/
日本テレビ放送網/東京都写真美術館支援会員 ほか
協 力 株式会社写真弘社/公益財団法人東京都歴史文化財団トーキョーワンダーサイト



「サハリン島」より 北緯50度、旧国境 2012年

展覧会概要

日本を代表する写真家の一人である米田知子の個展を開催します。

米田の作品は“記録”という写真の根本的な役割をベースにしなが、現実に見えているものだけでなく、そこにある記憶や歴史を背景に投影しています。

今回の個展では、映像を含む新作シリーズと、近年の作品より、日本やアジアの近代化における記憶や歴史をテーマにしたものを中心に構成しました。いま存在する風景や建物に、過去にどのような出来事が起こったのか。写真を見る側はその事実を知った途端に、見えているイメージが別のものに見える錯覚を覚えます。米田の作品は写真というメディアの持つ特質を最大限に生かしなが、鑑賞する側に見えているものの本質を、あらためて問いかけているのです。

米田の初期作品の多くはヨーロッパを題材にしていますが、近年は、台湾や韓国などアジアを捉えたもの、特に日本の近代化にかかわる地域をモチーフにした作品が増えています。20年以上海外で生活し、日本人としてのアイデンティティを強く意識している米田に、2011年の東日本大震災は大きな影響を与えました。今回の展覧会を通して、現在の米田の作品から何が見えているのか、見えていないものから何を受け取るべきなのかを考えます。

主な出品作品

本展では、本展初公開の新作、映像作品、近作の代表作品より 68 点をご紹介します。
米田の作品にとって、キャプションは重要な要素です。米田はキャプションがイメージに与える影響を十分に理解し、必要不可欠であると認識しながらも、慎重に、そしてあくまで写真を補完するものであると捉えています。

作品紹介



Japanese House

日本統治時代、蒋介石率いる国民党の支配を受けてきた台湾の日本家屋を通じて、歴史の側面を垣間見るシリーズ。時の支配者は統治国のあらゆるところに、権力の象徴である建造物や記念碑を建てようとする。「家屋」という日常風景のなかにある私的空間も、歴史の重要な目撃者である。

「Japanese House」より 蒋介石政権時代の参謀総長であった王叔銘
将軍の家（齊東街・台北）I 2010年

Kimusa

ソウルにある元韓国国軍機務司令部「キムサ」の内部を写真に写したものの。壁、窓、カーテン、ブラインドなど、外部を遮断する部分をテーマとするが、これらはここで国家機密が秘守されていたことのメタファー（暗喩）である。そこで何が行われその向こうに何があるのか、私たちの想像力がかき立てられる。

「Kimusa」より Kimusa26 2009年



サハリン島（新作・初公開）

日本人にとっては、間宮林蔵の樺太探検や間宮海峡の発見でなじんだ樺太島である。うち捨てられた工場や放棄された軍艦を眼にすると、半世紀以上も前の日本領だった時代の歴史が、そしてそれ以前に培われていたであろう先住民の歴史が亡霊のように浮かび上がってくる。それぞれの風景にちりばめられた残骸や古い建物を見ることによって、この島の経て来た数奇な時間や歴史を思い出させる。



左) 「サハリン島」より 帝政ロシア時代、囚人が掘ったトンネルの入口、“3人兄弟の岩”をながめて、アレクサンドロフスク・サハリンスキー 2012年

右) 「サハリン島」より 旧王子製紙真岡工場、ホルムスク 2012年



Scene

歴史は、目に見えるモニュメントや建造物だけに現れるものではなく、青い空、青い海、木々や野原など無形にも存在する。本作は風景によって「見えるもの」と「見えないもの」の関係を問い直している。見過ごしてしまいそうな風景が、キャプションによってその歴史的事実を知った途端に、違った雰囲気となって見えてくる。ただ、米田は歴史的な事実を見過ごしてしまうことを責めているのではない。ただその史実の存在を明示するだけである。

「Scene」より 道—サイパン島在留邦人玉砕があった崖に続く道 2003年

パラレル・ライフ：ゾルゲを中心とする国際諜報団密会場所

The Parallel Lives of Others: Encountering with Sorge Spy Ring

1930年代の日本を中心に極東で活動したスパイグループ、ラムゼイ機関／ゾルゲ諜報団。リーダーのリヒャルト・ゾルゲ、メンバーの尾崎秀実の再会場所となった奈良公園、同じくメンバーであり画家であった宮城与徳が連絡会談をしていた小石川植物園、資金と秘密書類の取引場所となった東京宝塚劇場など、現在では普通の人たちが普通に集う場所で、スパイ活動はおこなわれていた。私たちが見えている、と認識していることは、果たしてそれだけのものだろうか。イメージも鮮明な他シリーズ作品と異なり、古いカメラを使い、ぼんやりとしたイメージになっている。



「パラレル・ライフ」より 東京宝塚劇場（クラウゼン/ヴトケウィッチ）2008年

見えるものと見えないもののあいだ

Between Visible and Invisible

今回の展示作品の中で、米田がもっとも早い時期から制作しているシリーズ。本作は20世紀の著名人の眼鏡を通して、その人物の原稿や手紙を見ている。それは単に著名人というだけではなく、時代や歴史に翻弄されたことに注目している。たとえば、関東大震災を機に関東から関西に転居し、代表作『細雪』のモデルの松子夫人と出会った谷崎潤一郎。谷崎の眼鏡を通して松子夫人に宛てた手紙を見ることは、当時の歴史背景や生活の一部分を垣間見、そこで葛藤する精神を表現している。



「Between visible and invisible」より 谷崎潤一郎の眼鏡—松子夫人への手紙を見る 1999年

積雲

Cumulus

2011年3月11日、東日本大震災が起こった。我々は全知全能を駆使しても、抵抗出来ない大きな存在があることを知った。そして、あの日の災禍は単に自然の脅威という言葉では済まされないことがある。

「積雲」はラテン語で「小さく積み重なったもの」という意味がある。本作は、天皇制の象徴である菊花、靖国神社、平和記念公園、福島原発事故まで、さまざまなイメージが重なることで3月11日という日に至った現実を思い出させる。それぞれの風景に潜んでいる歴史や過去や人々の生活までも感じ取ることで初めて、作品は完成するのだろう。



「積雲」より 平和記念日・広島 2011年



氷晶 (新作・初公開)

Crystal

今までの作品とは全く異なり、ガラスやアクリルに張り付いた氷の結晶を接写レンズで捉えている。接写はしているが、目に見えないミクロの世界を撮っているわけではない。裸眼でも凝視すれば実は確認できるものなのである。時代が変化し、見えることが驚異で無くなっただけなのだ。ここでも「見る」ことはどういうことなのかを提示している。

「氷晶」より 氷晶 I 2013年

暗なきところで逢えれば (映像作品・初公開)

We shall meet in the place where there is no darkness

最近制作された映像作品を初公開する。夜間の定点撮影で日常的な一場面を捉えた作品は、今までの写真作品で表現していた時空の概念より、さらに強く「時間」感じさせる試みである。

「暗なきところで逢えれば」より 2013年



All photo Courtesy of ShugoArts

時は我々が何もしなくても流れていく。
ただじっとしていても、鼓動と血脈があるよう
ただ生きている。

空をみて、雲は早くも遅くも常に
形を変えて彼方へと消えていく。

何一つ、誰一人、
同じ場所（ところ）で、
同じ思いであるということは不可能だろう。

我々は目の前に写しだされた像を見ては
（無垢なき）観念 — を見いだす。

それは外から染められた
しかし内に秘めた 姿なき像である。

それは見えているのだが、
見えていないということと同じかもしれない。

見えないということは
見えているということに等しいかもしれない。

永遠ということは悲観的概念であり、
すべては永遠ではない — ことで
永遠を渴望する。

それに気づくのか、気がつかないか

‘過去を支配するものは 未来をも支配し
今を支配するものは 過去をも支配する’※

全ては断面的なことではなく
相反しながらも、継続的なことである。

米田 知子

※George Orwell Nineteen Eighty-Four Penguin Books 版より 翻訳は米田知子が行った。

光の彼方

(展覧会カタログより抜粋)

米田の作品には、中立で冷静な、極端に言えば冷酷ともとられる部分がある。今回、新作として発表された「サハリン島」の中に《北緯 50 度、旧国境》と題された作品がある。(本リリース表紙作品) 木立に囲まれたでこぼこ道を乗用車が彼方に走っていく写真だ。画面の手前に旧国境のラインがあり、視線は南樺太から北樺太方面に向かっている。明るい光をめざす穏やかな写真ではあるが、思い起こせば 1937 年に女優の岡田嘉子と演出家の杉本良吉、ともに配偶者を持つもの同士が、のちにマスコミに「恋の逃避行」と書きたてられる旧ソ連への亡命を試みたのがこのラインである。この彼方の光へ向かう写真とそのスキャンダラスな事件を結びつけることは難しい。二人はスパイ容疑で逮捕され、拷問と脅迫、それによる自白に基づく裁判で、杉本は銃殺、岡田も収容所に送られる。彼女たちもこのラインの向こう側には、光があり光の先に希望があると信じていただろうが、そのような世界は存在しなかった。しかしあえて米田は光の射す写真を撮るのだ。わずかに希望の萌しを潜ませているとはいえないだろうか。「暗(やみ)なきところ」は辿り着こうとすると辿り着けない桃源郷かもしれない。それでもこの先の世界が明るいものであるように、という希望を作品の中に密やかに込めている。

東京都写真美術館学芸員

藤村 里美

作家略歴

米田知子 (よねだ ともこ)

- 1991 年 ロイヤル・カレッジ・オブ・アート (ロンドン) 修士課程修了
- 2001 年 「手探りのキッス 日本の現代写真」東京都写真美術館、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館
- 2005 年 個展「記憶と不確実さの彼方」資生堂ギャラリー/東京
- 2007 年 第 52 回ヴィネチア・ビエンナーレ (イタリア館およびアルセナーレ)
- 2008 年 個展「米田知子展—終わりは始まり」原美術館/東京
第 13 回アジア・アート・ビエンナーレ・バンガラデシュ 2008
- 2012 年 キエフ・ビエンナーレ

関連イベント

■作家とゲストによる対談

7月20日(土) 15:00~16:30 ゲスト:片岡真実(森美術館 チーフ・キュレーター)

7月27日(土) 15:00~16:30 ゲスト:半藤一利(小説家)

■担当学芸員によるフロアレクチャー 会期中の第1・3金曜日 14:00より

関連書籍のご案内

展覧会の開催にあわせて、展覧会カタログを刊行します。全出品作品の図版、関係者および担当学芸員によるテキストを掲載します。

発行:平凡社 図録デザイン:近藤一弥 価格:2,940円(税込み)

開催概要

展覧会名	米田知子 ^{やみ} 暗なきところで逢えれば Yoneda Tomoko We shall meet in the place where there is no darkness
開催期間	2013年7月20日(土)～9月23日(月・祝)
会場	東京都写真美術館 2階展示室 〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 ホームページ www.syabi.com 電話 03-3280-0099
開館時間	10:00～18:00(木・金は20:00まで) ※入館は閉館の30分前まで
休館日	毎週月曜日(ただし月曜日が祝日の場合は開館し、翌火曜日休館)
観覧料	一般 700(560)円 学生 600(480)円 中高生・65歳以上 500(400)円 ※()は20名以上団体および東京都写真美術館友の会会員、小学生以下および 障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料 ※第3水曜日は65歳以上無料
交通機関	JR 恵比寿駅東口より徒歩約7分/東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩約10分 ※当館には専用の駐車場がございません。お車でご来館の際は近隣の有料駐車場をご利用ください

お問い合わせ

東京都写真美術館 電話：03(3280)0034 FAX：03(3280)0033
展覧会担当 藤村 里美 s.fujimura@syabi.com 山峰潤也 j.yamamine@syabi.com
広報担当 久代 明子 a.kushiro@syabi.com 平澤 綾乃 a.hirasawa@syabi.com
前原 貴子 t.maehara@syabi.com

プレス掲載用に図版データをご用意しています。上記広報担当までお問い合わせください。